

第38回 友の会会員作品展

世田谷美術館区民ギャラリーにて

11月5日(水)～9日(日) 出品者106名 出品作品数212点

秋が深まり砧公園の森が紅葉に色づく中で今年も恒例の会員作品展が開催されました。

1987年の第1回作品展から現在までこの展覧会は会員の皆さまの作品発表の場と交流の機会として定着しています。出品者の年齢、ご経歴など属性は様々ですが、たぶん共通項は日常生活と創作が一体になって芸術・美術の豊かさに繋がることへの期待でしょうか。一言で言うとなんとなく喜びのために絵を描くというように感じます。この会の基本は無条件で「美術!」ですから、様々な作風の作品群を前に知らない人同士でも自然に会話が始まる光景が随所に見られました。

出品は2系統で一つは友の会主催の実技講座で制作の「講座作品」、二つ目は自主制作の「一般作品」です。分野は油彩、水彩、日本画、ミクストメディア、木口木版画、銅版画、木彫刻、工芸等の多岐に亘ります。本年も実技講座でご指導下さった先生方からは特別出品を賜りました。そして橋本善八館長には館長推奨としてTOTTEMOII賞を選定いただき、また村上由美学芸部長には懇切な作品講評と会場の展示指導をいただきました。充実した作品展が開催できましたことは美術館の皆さま方の大きなご支援の賜物として厚く感謝申し上げます。(友の会事業部)



TOTTEMOII賞を選考中の橋本善八館長

友の会会員作品展に参加して

小室みどり

私は11月5日の村上由美学芸部長による講評会に参加して、友の会展を鑑賞しました。木彫、水彩、木口木版、油彩、銅版画、水墨画の各講座受講者の作品、日本画や写真、ミクストメディア、工芸品、切り絵やレーザークラフトまで多彩な作品200点あまりが展示されており、さすが美術に造詣の深い友の会の会員ならではの作品展だなと感じることにしきりでした。

講評会は40人くらいの参加者でした。ジャンルごとに学芸部長が1人1作品に限り、出品者に作品の背景や意図などをきいてくださり、作品の印象など直接講評してくださいました。

入口近くには、講師の先生方の作品も展示されていて、その深い技術や芸術性に浸ることができました。

多様な作品の世界に触れることで一層アートへの関心が高まったように思いました。



講評会での村上由美学芸部長(一番左)

世田谷美術館・友の会共催 美術講座

『小感—世田谷美術館と私』

講師：橋本善八 世田谷美術館館長

12月6日(土) 参加者63名

開設40周年に向け更なる発展を!!

飯泉善一郎

2026年3月、開設40周年を迎える世田谷美術館にとって、当館開設時から運営に関わってこられた橋本善八館長の特別講演は、時宜にかなったものだった。すなわち、大島清次初代館長と酒井忠康第二代館長を縦軸に、この間の企画展等の出来事を横軸に、当館の歴史を見事に織り上げたものになったと思えた。

縦の話では、大島、酒井各館長のお人柄に触れながら、橋本館長の対応の仕方、横の話では、企画展の開催を中心に、作品の収集、分館の設置などを巡る裏話や、コロナ蔓延時のご苦労話など盛り沢山の事柄が、ことこまかに話され、理解しやすかった。

特に「企業と美術シリーズ」では印象に残ったお話が多かった。すなわち、高島屋展でのアドバルーンの打ち上げ、竹中工務店展での越冬隊の荷物納入方法、東急展での現場責任者によるオープニング等に耳を傾けた。なお、コロナ禍に開催した「作品のない展示室」も思い出すことができた。



全体を通して、橋本館長は、常にこれまでの進め方を点検し、描くこと、観ることの楽しさを忘れないという姿勢であることに感銘を受けた。

世田谷美術館・友の会共催 解説・鑑賞会

「自然と魂 利根山光人の旅
—異文化に見た畏敬と創造—」

解説:池尻豪介 学芸員

10月25日(土) 参加者48名

太陽の画家 利根山光人とドン・キホーテ

田崎秀信

池尻豪介学芸員から本展の準備は通常の2倍、6年を要したのご説明に、作風が劇的に変わる利根山氏ならではのエピソードと納得しました。

注目したのは80年代からのドン・キホーテ連作。敗戦と困窮の時代を経て金融資本経済の激浪に翻弄される人々に、「民族に備わる逞しい力に気付く」と一槍投ずる意気込みを感じます。また作品《嗚呼!》では、ドン・キホーテの直上を覆う巨大な雲は人生の終わりを告げる「成した事、成し得なかった事の集大成」を表しているのでは?

利根山氏は自分にも輝く雲が現れたと悟り、ドン・キホーテを覬覦の境地の姿に刻み、絶筆としたのでは?と思いつらせました。

パリではなくメキシコを目指し、やがて民族の底力を発掘していく姿は、北川民次、岡本太郎を想起します。展示会図録の中に利根山の三越での個展で3人が談笑する写真を見つけ、互いに引き合う3人のパワーは、現代社会に蘇り、我々を力強く鼓舞し続けていると感じた展覧会です。



木口木版画講座

講師:鬼塚満壽彦 西浦啓二

9月3日(水)~10月8日(水) 全6回 参加者17名

白と黒 — 表現は無限大の楽しさ

藤縄明美

木口木版画とはどのような版画なのだろう?

いたって素朴な興味を持ち、初めて講座に参加しました。

講座初回に、木口木版画作家さん達の作品集などを先生から見せていただき、その美しさに変々驚きました。ハガキサイズ程の小さな版木の中に、何とも豊かな世界が広がっており、緻密で奥深く、デザイン性溢れるアート作品の数々!

私のような、版画制作に無縁の、全くの初心者でも大丈夫? と一気に不安になりましたが、先生方やスタッフの皆さんの温かく細やかな応援もあり、全講座を終えることができました。

毎週水曜日の午後、参加者の皆さんと小さな版木に向き合い、互いの作品についてお喋りし、時に公園の緑に目をやりホッとひと息。そうして講座最終日に掲げ上がった作品は、一つとして同じものではなく、個性あふれる素敵な作品ばかり。

6週間の短い期間でしたが、とても豊かな時間となりました。ありがとうございました。



第39回 アート散歩

中村正義の美術館

10月21日(火) 参加者48名

中村正義の美術館を訪問して

奥村麻基子

秋の日に川崎市の緑豊かな丘陵地にひっそりと凛として建つ中村正義の美術館を訪問しました。

大木に囲まれて建つ白い館、エントランスから見える狭い廊下、吸い込まれるように抜けると目の前がぱっと開け、壁一面に顔顔顔の作品群が。

どれも力強くこれでもか! と己の内部を見つめ探求し続けた人の自画像たち、反対の壁には人気のない直線的な家や林の美しい風景の数々、どの画面もピンと張った隙のない作品でした。

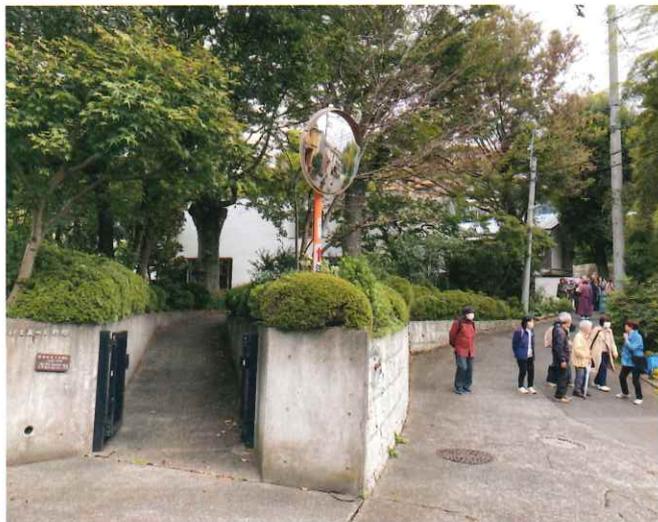
「本当にひとりの画家の作品なの?」という思いにとらわれ、53歳という短い生涯に多くの変遷をたどった軌跡がわかります。

また画室もそのまま展示されており、畳にかがみこんで描く画家のために大きな仕切りの窓は床までとどき、緑を直に感じつつ静かな環境で懸命に描いていた画家の姿が見えるようでした。

鑑賞後には画家のお嬢さんで館長の中村倫子さんから父の思い出や作品に取り組む姿などのお話を伺うことができ、有意義な訪問になりました。



中村倫子館長のお話



友の会主催 第64回 秋の美術館めぐり〈日帰り〉 北斎館(小布施町)、長野県立美術館(長野市)

11月11日(火) 参加者30名 同行者 向井真理 学芸員

美術館めぐりに参加して—北斎と東山魁夷— 鈴木みどり

今回の友の会の旅行は小布施の北斎館及び長野県立美術館の東山魁夷展をめぐる日帰り旅行だった。参加者は30名。添乗員さんの軽快なサポートもあり、皆さん、無事に新幹線で予定通り東京に帰ることができた。

小布施は葛飾北斎が晩年80歳代半ばに高井鴻山の招きにより滞在して制作した町で、風情がある。江戸時代にこの年齢で制作できる体力も制作威力にも脱帽である。個人的には森羅万象の現し方、人の表情や動きをとらえた北斎流の描写力は、とても“動”を感じる。見るたび発見があり、画狂人のなせる技などと思う。

一方で、東山魁夷は近現代に活躍した日本画家であるが、平成11年に北斎と同様90歳で亡くなっている。私は、彼の真摯でひたむきな姿勢と、風景画を彩るたおやかで穏やかな色が好きだ。とても“静”を感じる。

そして、鑑賞後に外に出てみると、冠雪のある山頂、澄んだ空気、ピリッと冷たい風、都会では感じられない開放感、原風景や紅葉のある山なみの色彩に感嘆する。天候にも恵まれ、遅い秋の有意義な1日となった。



北斎館



長野県立美術館



銅版画講座 講師：浦辺佳奈枝

9月5日(金)～10月10日(金) 全6回 参加者15名

銅版画の魅力

水落美香

我が家のリビングには、大好きな山本容子の版画が飾られています。彼女の線と色の表現に憧れていましたが、世田谷美術館美術大学で銅版画の授業があり、まさか自分自身が経験できるとは思っていませんでした。

授業では、なかなか思うように表現できませんでしたが、銅版画の奥深さ、面白さをさらに体験したく、ステップアップ講座、そして今回、浦辺先生の友の会銅版画講座を受講することができ幸せを感じています。

絵画とは異なり、銅版画は、銅版に線を刻む時の緊張感と、「どのような線が表現できたか」が刷り上がって初めてわかるという、まるで実験のようで、プレス機から作品が姿を現す瞬間は神秘的です。描画、腐食、刷りが一体となって完成する銅版画は、奥が深い芸術だと感じます。

浦辺先生の講座ではカラーインクも使用でき、同じ版でも異なる雰囲気のパターンが刷り上がることに感動し、インクの組み合わせや拭き取りの加減など、先生の的確な指導のもとで制作を進めるうち、ますます銅版画に魅了されています。

次回は、黒と光の表現が可能なメゾチントにぜひ挑戦しようと思います。



新しい会員証

2026年度の会員証のデザインが決まりました。会員証の作品は収蔵品の中から選んでいます。

塔本シスコ
《絵を描く私》
1993年



これからの事業について

- ◎アート散歩 3月下旬
- ◎さくら祭 3月28日(土)～29日(日)
- ◎友の会総会 5月予定
- ◎美術館めぐり 6月予定
- ◎解説・鑑賞会 企画展・ミュージアム コレクション展ごとに予定

※2026年度の各事業につきましては実施の詳細が決まり次第、会員の皆様にチラシや友の会ホームページ等でお知らせいたします。

世田谷美術館友の会に入会しませんか！

世田谷美術館エントランスにはラテン語で「藝術と自然は密かに協力して人間を健全にする」と彫り込まれています。館のサポーター・ファンクラブである友の会に入会し、生活に彩りを加えてみませんか。特典や入会手続きは下記へ。

お問い合わせは友の会事務局へ

入会案内(リーフレット)や下記ホームページもご覧ください。

Tel. 03-3416-0607
[https:// setabi-tomonokai.jp/](https://setabi-tomonokai.jp/)

